

第66回全日本9人制バレーボール実業団男子選手権大会

戦 評 用 紙

7月22日(月) 【準決勝】

中部徳州会病院 (沖 縄)	2	$\left(\begin{array}{c} 21 - 16 \\ 21 - 12 \\ - \end{array} \right)$	0	JFE西日本 (広 島)
--------------------	---	---	---	-------------------

主審： 谷口 和久 (和歌山)

副審： 村松 嘉二郎 (滋 賀)

記録員： 神林 清松 (茨 城)

【戦 評】

準決勝 Aコートは大会三連覇をねらう、第1シード中部徳州会病院 対 第5シードJFE西日本の対戦。

第1セットは序盤は中部徳州会が強烈なサーブで抜け出そうとするがJFE西日本も負けじとコンビバレーで追い上げる展開。しかし、徳州会の力ある攻撃にJFEレシーブ人が崩され、徐々に点差が開き、粘るJFEの攻撃を徳州会 No. 13林選手とNo. 19大嶋選手の高いブロックに阻まれ、21対16 で中部徳州会病院が第1セットを先取。

第2セット、序盤から中部徳州会 No. 17岡部選手のサーブがきまり流れをつかむ。JFE西日本も徳州会の連続ポイントをとめるものの徳州会の多彩な攻撃にリズムをつかめず終盤へ……

終盤は、JFEも色々な攻撃をし、徳州会のブロックを破るものの、徳州会No. 5下地選手の好レシーブに阻まれ最後は途中交代で入った徳州会No. 15小野選手のスパイクが決まり試合終了。

21対12 で中部徳州会が2セットも取り、セットカウント 2対0 で中部徳州会病院が3年連続決勝戦へとコマを進めた。

記載者： 増田 千佳 (滋 賀)

第66回全日本9人制バレーボール実業団男子選手権大会

戦 評 用 紙

7月22日（月） 【準決勝】

J R九州 (福 岡)	2	$\left(\begin{array}{c} 21 - 19 \\ 22 - 20 \\ - \end{array} \right)$	0	住友電工 (大 阪)
------------------	---	---	---	-----------------

主審： 田村 誠 (熊 本)

副審： 笠原 隆博 (静 岡)

記録員： 徳本 幸子 (京 都)

【戦 評】

平成25年度代66回全日本9人制バレーボール実業団男子選手権大会準決勝Cコートは、

前年度準優勝の住友電工(大阪)対JR九州(福岡)の対戦となった。

第1セットは、住友電工 No. 7池ノ上やNo. 3青木の両サイドからの攻撃に対し、

JR九州は No. 10蔵本のエースらしいダイナミックな攻撃により、初盤は点の取り合いが続いた。

中盤になると住友電工 No. 18 のセンター攻撃によりJR九州を終始リードするも、12対15で

JR九州は No. 16松永に代えNo. 7藤島を投入すると、2本のサービスエースを含め5連続得点で

17対15と始めて住友電工からリードを奪った。

終盤は両チームとも点の奪い合いとなったが、JR九州が2点差を守りきり 21対19で1セット目を取った。

第2セットは波に乗るJR九州が中盤まで6点差を付けるリードで住友電工を圧倒していたが

2回目のタイムアウト後に住友電工 No. 5越猪・No. 7川ノ上のスパイクやブロックで2回にわたる4連続得点

20対20 のジュースに持ち込んだ。

しかしながら、最後はJR九州 No. 10蔵本の強烈なスパイクが連続で相手コートに決まり、

追い上げる住友電工の多彩な攻撃で前年度準優勝チームの粘りを見せ観客を魅了するプレーが続いたが

JR九州の監督の采配やチーム一丸となってボールを繋げエースが決めるという気持ちの強さが勝敗を

左右する結果となった。

記載者： 矢野 祥行 (東 京)

第66回全日本9人制バレーボール実業団男子選手権大会

戦 評 用 紙

7月22日（月） 【決勝戦】

中部徳州会病院 (沖 縄)	2	$\left(\begin{array}{c} 21 - 12 \\ 21 - 8 \\ - \end{array} \right)$	0	J R 九州 (福 岡)
--------------------	---	--	---	-------------------

主審： 浜本 斉 (鳥 取)

副審： 田中 成幸 (滋 賀)

記録員： 今井 傳悦 (大 阪)

【戦 評】

平成25年度代66回全日本9人制バレーボール実業団男子選手権大会の決勝は、前年度優勝の中部徳州会病院と初の決勝へと上りつめたJR九州となった。

順当に勝ち上がった徳州会に対し強豪・住友電工を破り勢いのあるJR九州。暑い和歌山で、暑い決勝が幕を開ける。

第1セット序盤から両チームの力強いサーブが入るが、双方友に多彩な攻撃を繰り返す。

中盤、徳州会 No. 13林のサーブから流れをつかみ、5連続得点をあげる。JR九州は No. 6小森が巻き返しをはかるアタックを決めるが力及ばず、21対12で中部徳州会病院が先取した。

第2セット、1セット目から勢いがある徳州会 No. 8小口のサーブからの3連続ポイント。

No. 13林の5連続ポイント。No. 10富間からの5連続ポイントと次々と強烈なサーブをJR九州にたたきつけ、JR九州のエースNo. 10蔵本もアタックにて対抗するが、徳州会のエースNo. 2高橋にねじ込まれた。

最終的には 21対8 と、JR九州の持ち味を出せないままゲームが終了した。

中部徳州会病院は3年連続6回目の優勝と秋に開催される桜田杯のシード権を獲得した。

決勝戦では持ち前のパワーを発揮できなかったJR九州、今後の活躍を期待したい。

記載者： 畑中 郁生 (宮 城)